



日本GAP
16
No.

仙台支部報

IGAP-JAPAN SENDAI INFORMATION

頒価 無料/送料60円(切手可)

○編集人：安藤登雄
○発行人：笠原弘可(仙台支部代表)
申込先 〒980 仙台市東10番丁1
国鉄アパート1-18

自然の中で

私は子供のころから常に自然に深く興味がありました。小学校から帰って来ると、宿題もせずにカバンを家の中に放り投げて、一目散に友だちのところへ遊びに行ったものでした。ヤブの中に入っては住み家をついたり、川や沼へ行ったら魚を釣ったりして、自然との触れ合いに不自由じゃありませんでした。

小さなナソ

当時、私の心には単純で素朴な疑問がいつも駆け巡っていました。カブト虫の幼虫を見つけては「どのようにして成虫になるのかな」と思ったり、魚を釣っては「よくも水の中で生きら

探究

仙台市
柳村敏春



れるな」などと思ったりもしました。

図鑑を見て頭では知ってるつもりなんだけど実際に目で見て触ってみなければわからないことって沢山あると思います。「百聞は一見にしかず」というのはまさにこのことかもしれません。私はそのような疑問を解決するために、いろいろな本で

調べたり、あるいは直接観察しに行きました。でも知れば知るほど新たなナソが増えるばかりでした。それでも私の中の探求心があきらめることはありませんでしたが、あまり思い詰めても仕様が無いと自分自身を納得させることも多々ありました。

話は変わりますが、現在大人になって考えてみると、子供の

ころはやはり自然の中で友だちと遊び回ることが大切だと思えます。自然から、あるいは遊びの中から学ぶことって無数にあると考えるからです。それに比較して今の子供らは……と言っても始まらないでしょうか。時代背景も違いますし……。

探究心が エネルギー

大会と私 (2)

UFO出現!

それはとても広い部屋でした。久保田先生を囲んで、私はGAPの皆様と共に、まるで最後の晩さんのようなスタイルで床に鎮座して先生のお話を耳を傾けていました。お話の内容は確かイエスにかかわるある人物についてでした。

突然、ある会員の方が外に飛び出して空を見上げました。私も後から先生や主人や他の会員の方々と一緒に外に出てみました。するとどうでしょう。薄曇りの空に白く輝く母船が数十機も出現しているではありませんか。母船の周囲には白銀に輝くオーラのようなものも見えていました。そのうち2機は真横あるいは上下に移動して消え、さらにある1機は白から黒へと色の変化を見せて消えていきました。この素晴らしい光景をGA

山形県 清水敏恵

Pの皆様方と感動して見ていた私は、ふと、このもっとも上空に1000機ぐらいの母船が待期しているのではないだろうかと思えてなりませんでした……

実は……

……以上は1月18日午前5時50分ごろに見た私の夢です。最近何かと忙しい日々を過ごし、円盤観測やテレパシー練習などから少し遠ざかっていた状態だったし、アダムスキーの本も時々しか開かないような日常だったのですが、そんな時突然こんな夢が見られるなんて、うれしそうな焦ってしまいそうな、そんな気持ちになりました。そして安藤さんからこの原稿を頼まれていたのをハタと思い出したりして、何か意味のあるような夢でした。

新たな心で

さて今年6月24日に仙台で仙台・山形合同支部大会が開催されます。仙台へは1度月例会へ参加させて頂きましたが、皆素晴らしい人たちがばかりだったので、今度の合同支部大会はきっと大成功となるに違いないと確信しました。

最近ではGAPの多くの方々が委託販売や献本活動などで活躍されており、そのおかげで、ほんの少しかもしれませんが、カルマを持った人々がGAPの門をたたこうとしています。これは素晴らしいことだと思えます。GAPの皆様が結束力が新しい展開へと推進させているという感じがします。そういう中で私自身ももっと努力して自分を高め、新しいメンバーの方々の疑問の解決に少しでも役に立てたらと思えます。

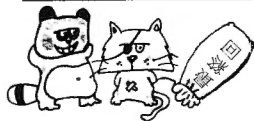
そんな新鮮な気持ち、そして謙虚な心をもって今年も支部大会にのぞみ、皆様と共にしっかりと学んでいこうと思います。

話を元に戻しますが、私は少年時代の探究心が今でも生きていますし、これが私を支えている大きな一部分だと感じます。数年前にアメリカが打ち上げたボイジャーという探査機が土星の輪の写真を電送してきたとき、ある科学者が言った言葉に次のようなものがありました。「今まで1つの輪として考えられていたが、沢山の層に分かれていることがわかった。だが、1つのナソは解決されたが、それ以上にナソが増えた」

アメリカをあそこまで発達させたものは、ナソを解き明かそうとする心と、そしてナソをナソとして素直にとらえる心のなせる技と言えます。この探究する心を自然から地球へ、そして宇宙へと拡大していったとき、われわれのセンスマインドは宇宙の英知に少しずつではあるが謙虚な心をもって今年も支部大会にのぞみ、皆様と共にしっかりと学んでいこうと思えます。

第5回日本GAP仙台・山形合同支部大会概要

日時：6月24日(日)13時～17時。会場：仙台市市民会館会議室。夕食会：18時～20時(会場未定)。宿泊：ニューシティーホテル。詳細次号掲載。



出会いの中で

千葉県
山口緑

わかります。今、私は連載第1回目から読み直してみています。

最近私は「感謝」という言葉を改めて考え直しています。あらゆるものに「ありがとう」というやさしい気持ちを投げかけますと、とつても心がやわらかくなり、全体のなかに溶け込んでいくような気がします。このイメージをもっともっと押し進めれば「一体化」という境地に至る何かのカギをつかめるのではないだろうかという気がします。

私は努めて、どんな物にも感謝しようと思っています。万年筆を持っては「よろしくお願ひします」とあいさつし、使い終わったら「ありがとうございました」と心をこめて感謝し、ついでに紙にもお礼を言います。食べ物や頂くときはもちろん、一日お世話になった服にも感謝します。自分と接触したありとあらゆる物に心からお礼を言います。

それから一日の終わりには、

一日中休むことなく働いてくれた肉体にも感謝します。自分の肉体に感謝するということは、ある意味では非常に重要なことではないかと思っています。

私たちは各自の肉体を通していろいろな印象を感じています。目があるからこそ多くの美しい光景を感じることができ、耳があるからこそ素敵な調べにうっとりすることがあります。

私たちはこのようにいろんなことを感じ取ることができる肉体を持っている(与えられた)ことにたいして、深く、強く感謝しなければなりません。感謝の気持ちが強ければ強いほど私たちは宇宙の中に入って行くことになるのであり、生命・宇宙力・意識と一体であると強く認識できるのだと思います。

私は子供たちと接していて、たびたび腹を立てたりイライラ

したりかんじゅくを起こしたりしてしまいます。しかし時々ふと「私が腹を立てたりできるのも、私に肉体が与えられてこうして生きているからなのだ。生命体と生命体がぶつかって、そのためにいろいろな感じを受けることができるのだ」と考えることがあります。すると怒る気持ちはいつの間にか消えうせ、逆に子供たちに感謝したくなるのです。そしてこの子供たちだけでなく、宇宙の意識とも友だちになって、因の世界へ入って行くことができるような気がしてくるのです。

「宇宙の意識の良き表現体になろう！」というのが私の目標です。自分を神の道具として宇宙の前に差し出したいと思えます。そして、このように感謝の気持ちを強めるこそが、自分の考えを持たずに全体の中へ自分を差し出す気持ちを持てるようになる方法ではないかと思うのです。そこにこそ「私の意志が行うのではなく、父の意志がなされるのだ」というイエスの言葉の本当の意味があるのではなからうかと思われるのです。

最後になりますが、私はこんなに素晴らしい宇宙哲学を知り得たことに、そして多くの素敵な方々にお会いできたことに心から感謝いたします。そして何より、私がこうしてここに存在できることにこそ最大の感謝を覚えずにいられません。

きょうはどうもありがとうございました。(日本GAP東京本部・1983年5月7日の月例研究会における体験講演より)

＝編者付記＝

以上で山口氏の講演連載を終

編集
◎毎月、どこかの支部報を頂く。開いてみるとおなじみの著者の記事が並ぶ。これをマンネリと呼ぶには思慮が無い。毎回投稿

そして思うことは 山口氏の連載記事「たいよう」(本支部報 No.8～11掲載)を終えた感想にも書きましたが、私は山口氏のクラスの児童たちがうらやましくなりません。私があと17歳若ければもしかしたら山口先生の教え子になっていたかもしれないのに……。

最後に山口氏の学級通信紙から次のような詩を転載してこの連載を閉じたいと思います。長い間で愛読ありがとうございました。(A)

この子らと

山口 緑

この子らとめぐり合い
1年と0.8年ほど
顔を合わせ
いっしょに
泣いたり 笑ったり どなったり

私には彼らが
子供に見えないときが
しばしばあり
本気で心と心をぶつけ合う
自分が20年も長く
生きてきたことを
すっかり忘れ
いっしょになる



彼らの目に涙を見るとき
ふと我が身を振り返り
自分の手を見 腕を見る
そのとき

彼らはおそろしく小さく
おそろしく
かわいく映る



子らよ
私の
腕の中にこい!



後記
の行動力に感服すべきだ。私たちが学んでいる宇宙哲学とは実践哲学のはずではなかったか。それを忘れないでいたい。(A)

草原

xxxxx 今昔狂気物語 xxxxx 笠原弘可

およそ「気狂い」の名を冠すれば、あまり芳しい姓辭とはいえない。私は「本 気狂い」を拝名して久しい。名付け親は細君である。無中になると、どこでも読む。トイレは言うに及ばず、食事中も食卓に置いて読みながら食らう。当然、ハシの動きは適当になる。おかずと間違えて、子供の鼻を摘んで以来、クレームが付き、教育と保安を理由に、食事中の読書は禁止された。風呂の中の読書がまたいい。しかし、これもあまり長いと細君から注意される。「三国志」を今読んでいる。今から1800年も昔の中国の物語である。NHK人形劇でご覧の方もいると思う。特に宇宙的な内容というわけではない。仁とか義を尊ぶ色が濃い読み物だ。勧善懲悪を前面に押し出すような単純さは無い。ある程度史実に基づいている良さであろう。簡単に首をはねる所など、いかにも未開で残酷と思うが、実際は、現代の方がもっと残酷な「近代兵器」による殺りくが行われている。謀略によって他国を欺く。これまた、依然として現存し、かつ大昔に比べて格段と複雑なやり口になってきている。国対国はおろか、企業対企業、人対人と、陰謀の存在しないところはない。こうなると、1800年前も今も、人間は変わってないということになる。よくまあ変わらずにいられると思う程である。そのがんごさには思わず頭が下がるが、下がったまま倒れてしまいそうでもある。ここで倒れては折角この地に生まれたかいいもない。せめて少数ながら、旧態依然としたこの世に、宇宙的な変化の波紋を駆けたいものである。